

2. 調査内容

2.1 調査の方針

平成 11 年度および平成 12 年度にかけて実施された関東平野（横浜市地域）の地下構造調査によって横浜市北部地域の地下深部に幅 3.0km 程度、比高 300～500m 程度の撓曲が認められ、この撓曲が横浜市緑区～川崎市中原区にわたる西南西－東北東方向に連続している可能性があることが明らかになった。

調査結果と既存の深堀ボーリングデータとの比較により、撓曲は第四紀層の上総層群に生じているものと判定されている。さらに、撓曲の比高は深度が浅くなるに従って少なくなっており撓曲の活動には累積性が認められることから、この撓曲は活断層である可能性がある。

この撓曲が活断層である場合、撓曲帯は横浜市域に伏在しており直下型地震が発生する可能性があることから、撓曲帯の性状を把握することは防災上極めて重要なこととなる。

そこで今年度の調査としては、浅層部の地形・地質構造について調査し従来の調査によって確認された撓曲活動の累積が最近の年代まで連続しているか否かを確認するとともに、撓曲の詳細な性状を把握するための地質調査計画についての基礎資料を得ることとした。

2.2 調査内容

本年度は、浅層部の地形・地質構造を把握する調査として、以下に示す四項目の調査を実施した。

- ① 浅層反射法弾性波探査
- ② 地形判読調査
- ③ ボーリングデータベース調査
- ④ 地表地質踏査

浅層反射法弾性波探査は平成 11 年および平成 12 年に実施された調査結果によって想定された撓曲の延長部にあたる箇所で実施した。地形判読調査、ボーリングデータベース調査および地表地質踏査については、文献資料調査によって撓曲の性状を把握するために着目すべき点を抽出した上で実施した。

各種調査結果を解析し、撓曲の活動性および今後実施すべき地質調査の方針について検討を行った。